大正三年に於ける文科に關する學術進歩の大勢

（第一回學術談話會總會席上報告）

一、四　水谷年惠
一、四　小倉千年
一、四　宮崎勝枝

其一

世界は、今舊文明より新文明に目覺めんとす。歐洲の戰亂は、恰も曉の鐘の如く、舊文明の暗の空氣を振はしつゝ、今や希望と歡喜の黎明に移らんとしつゝあり。

實に大正三年は外、世界歷史上に未だ見ざる世界的變動の年なりき。內、我が國民の思想及生活の上には、黑雲掩へる諒闇の年なりき。而して實に、國民的及世界的影響を、最も顯著に、且つ痛切に感觸せる年なりしなり。思ふに大正三年は、世界及我が國民生活の將來に於て、一大回轉期として、注目すべき深意を藏する時期たるべし。こゝに大正三年に於ける、我が文科に關する學術進歩の大勢を、報告するにあたり測らずも、この主要なる問題に逢著せるは、最も光榮とする處なりき。

大正三年に於ける、我が國思想言語文學に關する大勢を回顧すれば、主として歐洲文明の移植にありき。而して實に科學の進歩は思想界の基礎を震撼し、眞空放電、X光線、ウラニウム、ラジウムの如き、放射可能

體中に電子の存在を認めてより、物質構造論に變革を起さんとし、又其放射能力の發見は、古來の地球上の生物に關する、科學的運命觀を一變せしめ、且、生物學、心理學の研究は、數百年來數學を應用して測定せる事實の外、更に廣き經驗界の存在する事を、知覺せしめんとしつゝあり。個性生命潜在意識に關する智識の明にせらるゝにしたがつて、古來の理智に泥める哲學說の如き傾倒せずんば止ざるの概あり。此くの如くにして、ベルグリン・ラッセル・オイケン等起りて思想界を風靡せんとし、大正三年に於ける我が思想界の分野には至るところ、オイケン・ベルグリンの聲を聞かざるはなかりき。然れどもこれ客觀的・唯物的思想・プラグラズム等の現在的思想に飽きたる思想界が、主觀的・唯心的思想を得てこれを歡迎したりしに因るべし。而して思想の主たる流れは恰も現代獨逸哲學界に於けるが如く、カントに出發し、カントの殘したる問題を、カント哲學の根本精神に從ひて解釋せんとする唯心論にして、吾が哲學界の漠然たる要求に明確なる內面的の方向を與へたるものは少數の學者思想家なりき。此の思想家の長き努力に刺擊せられ、若しくは指導せられて次第に意識的に唯心論的傾向を有するに至れり。

更に轉して言語文學の趣勢を見れば、金田一氏の「北蝦夷遺謠篇」の如き、白鳥博士の「朝鮮語とウラルアルタイック語との比較研究」、中目學士の「樺太諸民俗の言語について」の如き何れも國語の比較研究上重要の資料たり。又言語研究としては、大部の百科辭典の續刊もしくは終結及勝屋氏の「外來語辭典」黑田氏の「美術辭典」新潮社の「現代文藝辭典」、「地名辭典」の如き特殊辭典の刊行せらるゝあり。又沼波氏の「徒然草講話」の如き古來註釋法の典型を脫して國語研究の新方面を拓き、尾上先生の「日本文學新史」出て文學史研究に貢獻せらるゝ處あり。國語に關する叢書の發刊帝國學士院の「假名遺沿革料」「類聚古集」の復寫

の如き特記すべきものあり。この外、國學院雜誌・藝文等に於ける特殊の研究に見るべきもの少なしとせず。又、漢文に關しては竹添氏の「左傳研究」の如き又藝文・東亞研究・東洋時報等に於ける服部・星野・內藤諸博士の支那文學・道德・制度等に關する研究、又、後藤學士の文字に關する研究及びローマ字運動の如きいよ〳〵微を穿つの觀あり。特に國語教育の方面にありては保科先生の講演及著述によりて活趣を帶び來り、頃日國語調査の議ありと聞くが如き眞に歡喜に堪へざるものあり。又漢字タイプライター及び中根式速記術の發明の如きも亦看過すべからざるものゝ一ならん。かくの如く一見頗る慶すべきが如しと雖も、大正三年に於ける言語文學に關して留意すべき問題は思潮界に於けると仝じく外國文字の移植にありき。

この事は獨り大正三年にのみ現はれたる特異の現象にあらずして、定見なき外國文學の飜譯飜案に關しては明治時代以來引續き識者の憂慮するところなりしが、昨年に至りては廉價なるセリースの盛に行はれて、外國文學思潮の普及を見んとし、我國古文學にも口語譯の試みらるゝあり、其の多くは只梗概を敍述するに止まり、ともすれば選擇及び紹介の方法に於て、不謹愼なるものなきにあらず。かくて、歐米に於ても一部の社會にのみ賞翫せらるゝ作品の普通的に紹介せられ、併せて外國文學思潮の評論盛に行はるゝにつれて、絢爛目を眩する如きものありしと雖、もしそれが地味を異にし背景を別にせる我が國民思潮の整調を害ふ如きものあらんか國民性の淘冶訓練に就て寒心すべき事情なきにしもあらざるなり。

然るに大正三年の後半、內に於ては政治上・經濟上・社會上特殊の事件の勃發するあり。外、歐洲戰亂の發生せると共に豫て數年來歐洲思想文藝に對する盲動模倣に對して甚だしく厭惡の情を抱ける一部の人士はこの機會に遭遇して一時に思想の獨立を唱へ、國民的自覺を催起せんとするに至れり。此の如きは近時起れ

る事件の勃發を待ちて始めて、生すべきにあらずして、實は早晩來るべき大勢なりしが如しと雖、突如として水の決するが如く蕩々泪々として思想界を撼かさずんは止まざるの概あるは竊に悅ぶところなり。歐洲戰亂の終局はそも〳〵何の時か知り得べからずと雖黃雲一たび去りて平和の光の輝き始めん時電光の如く人の心を照らすものは茫漠たる空想・抽象的論議にあらずして一層切實なる具体的なる國民的精神及び國民的生活の自覺にあらん。我等は更に堅實なれ・本質的なれ・深邃なれ・創造的なれ、との心の奥よりの叫聲を止めて遠く逝ける「大正三年」を送りて、思想文藝の分野に殘せる餘韻に耳傾くれば、その反響の更に廣く大なれと思ふの情實に切なるものあり。

こゝに別冊調査報告（之れを略す）を具して大正三年に於ける文科に關する事項の一部を報告す。思ふに大正四年は更に最も留意すべき幾多の問題を藏するに似たり。庶幾くは今後猶同學の諸氏と共に國民精神の去來に關して靜思瞑想し、國民教育の任務を全うせん事を。

其　二

一、四　窪　田　けい

大正三年に於ける文科に關する學術中、特に歷史地理研究の大要を報告す。

大正三年に於ける歷史に關する研究は其の範圍に於て益廣く、其方法に於て愈精しく、研究及び報告の發表せらるゝもの頗る多かりしと雖、これを綜合し且つ分析すれば三の特點に想到し得べきが如し。

其の一は史學の基礎概念に關する最近思想の影響及び一般史料の續々公刊せられしことなり。一般史學に關しては、大類學士の「オイケンの歷史哲學」、石田學士の「ウインデルバンドの史學と自然科學」、鈴木學士

の「バテン氏の歷史の經濟的解釋」、內田博士の「傳記の研究」、植田學士の「史學と文學」の如き數篇に過ぎざりしと雖、史學の基礎に關する學說として特記すべき研究紹介なりき。而して大日本史料及び大日本古文書の續刊、國史刊行會、國史叢書及び經濟叢書、佛書刊行會等の出版の如き、いづれも斯學の貴重なる資料にあらざはなし。

其の二は鄉土的研究の發達にしてこれ大正三年に於ける史學界に於て特に注意すべき事項の一なり。先づ史蹟名勝天然紀念物保存會の成立及び其の出版の影響は各地方に及び、史蹟名勝の調査保存を目的とせる團体勃興し、なほ縣會に於てこれが方法を講じ、或は國法を以てこれを保護し、これに關する一般公德心の緊張を見るに至りしは注意すべき現象の一なり。既に此の時に當り三好博士の「歐洲各國に於ける天然記念物の保存」の如きは最も有力說述の一なりしが如し。先年以來雜誌「鄉土研究」の發行あり、著しく鄉土的・民俗學的研究の勃興を見しが、此の方面に於ても各地方に鄉土的研究趣味の發生するあり。未刊鄉土史料の發刊、鄉土史研究會の成立、其の機關雜誌の發行せらるゝあり。かくて學界多年の懸案たりし神籠石問題は更に白鳥・關野博士・大類・谷井學士等の間に論究せられ尙將來繼續せる興味ある問題たるに似たり。又上古の陵墓に關しては先年來喜田博士の研究を見たりしが高橋健自氏考古學上よりこの問題を批評せらるるに及びて興味ある爭論を惹起し、これ亦未了の問題として存せり。而して一般鄉土研究に於ては、本邦にては、九州最も多く研究せられ、次に房總、伊勢及び其の附近、三河、四國等にしてその研究の結果はただ地方的問題たるに止らずして、本邦史研究の進步に關するもの少からず。又朝鮮に關しては洞溝平原の古城趾に就いて白鳥博士鳥居氏の間に論究せらるゝ所あり。又滿洲に關しては眞番郡の位置に關して市村博士・白鳥博士・箭內學